

2022年11月8日

令和4年度「子供・若者育成支援のための地域連携推進事業(中央研修大会)」

## 子ども・若者の成育環境の変容と居場所事業

子ども・若者の生の全体性の回復に向けて

駒澤大学 萩原建次郎

1

### 講師プロフィール

○専門:教育人間学、社会教育学

○研究テーマ

子ども若者の居場所と参画。社会構造の変化と子ども若者の人間形成。

○主な著書

単著『居場所—生の回復と充溢のトポス—』春風社,2018年

編著『若者の居場所と参加—ユースワークが築く新たな社会—』東洋館出版,2012年

共著『子ども・若者の自己形成空間—教育人間学の視線から—』東信堂,2011年

○社会的活動

横浜市子ども・子育て会議委員 ・ 横浜市子ども若者支援協議会委員

中野区子ども・子育て会議委員

品川区子ども・若者計画専門検討委員会委員

横浜市青少年活動拠点「さくらリビング」運営連絡会メンバー

世田谷区立野毛青少年交流センター運営委員会委員など

2

## 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

### やせ細る中間の共同世界①

#### 事例1

自転車で通りを走る時、歩道を走ると、歩行者から邪魔者扱いの視線が注がれる。かといって車道を走ると自動車から遠慮なくクラクションが鳴らされる。

その時僕はいつもこの自転車の置かれた状況は、中学生の時期に似ているなど考えたりする。

中学生には地域に遊び場という場はなかった。もちろんバイトもできないから金もないし、公園では小学生の保護者から冷たい視線。まるで違法駐輪の自転車のように、どこにも止める場所のない自転車のよう、学校と家の間の社会に僕の居場所はなかった。それでも中学生には自転車しか乗る物がなかった。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

3

## 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

### やせ細る中間の共同世界②

#### 事例2

小学生の頃、私は毎日のように放課後は野球をやっていた。場所は住宅密集地に無理矢理作ったような小さな公園であった。ある日、野球をしていると、ボールが民家の敷地内に入ってしまった。それまでは、近所の人が多めに見てくれていたが、さすがに限界にきたのか、「もうここで野球はするな」というお叱りをもらってしまった。

その日以来、その公園では実質野球ができなくなってしまった。しばらくして町内会も動き、花壇を作ったり、立札を立てることで、一層遊びにくくなってしまった。

結果的に、私の居場所はなくなったに等しかった。学校の校庭では、野球どころか球技全てが禁止、他の公園や広場は近くにはなく、心にスッポリと穴があいてしまった気分だった。

## 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

### やせ細る中間の共同世界②

#### 事例3

中学生の時、「不良」と呼ばれてしまう友達が話していた言葉を思い出した。「別に何をやるわけでもないのに、どこにいてもなんでここにおると白い目で見られている気がする」。派手な服装をし、学校をさぼってうろついている彼らの中にあっただのは、そのような居場所のなさであったのだろうか。そしてその言葉を聞いた当時の私が、その言葉に驚くのではなく、共感していたことも思いだした。

制服に包まれている限り、昼間いることを許される場所は学校しかないし、放課後もいることを許される場所は限られている。クラブ活動、塾、習い事、それ以外の場所にいる時は明確な理由が必要で、だから私たちは学校に、塾に、クラブ活動に、必死に居場所を求めていたのだろう。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

5

## 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

### 現代社会における子ども・若者への能力期待

図表1

名称	機関・プログラム	年
生きる力	文部科学省	1996
エンプロイヤビリティ	日本経営者団体連盟(日経連)	1999
リテラシー	OECD-PISA(生徒の学習到達度調査)	2000-15(3年おき)
人間力	内閣府(経済財政諮問会議)	2003
キー・コンピテンシー	OECD-DeSeCo(コンピテンシーの定義と選択)	2003
就職基礎能力	厚生労働省	2004
社会人基礎力	経済産業省	2006
就業力	文部科学省	2008
21世紀型スキル	ATC21S(インテル、シスコ、マイクロソフト)	2010
21世紀型能力	文部科学省(国立教育政策研究所)	2012

松下佳代『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育』  
ナカニシヤ出版,p.92,2014より作成し、萩原が新たに加筆 ©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

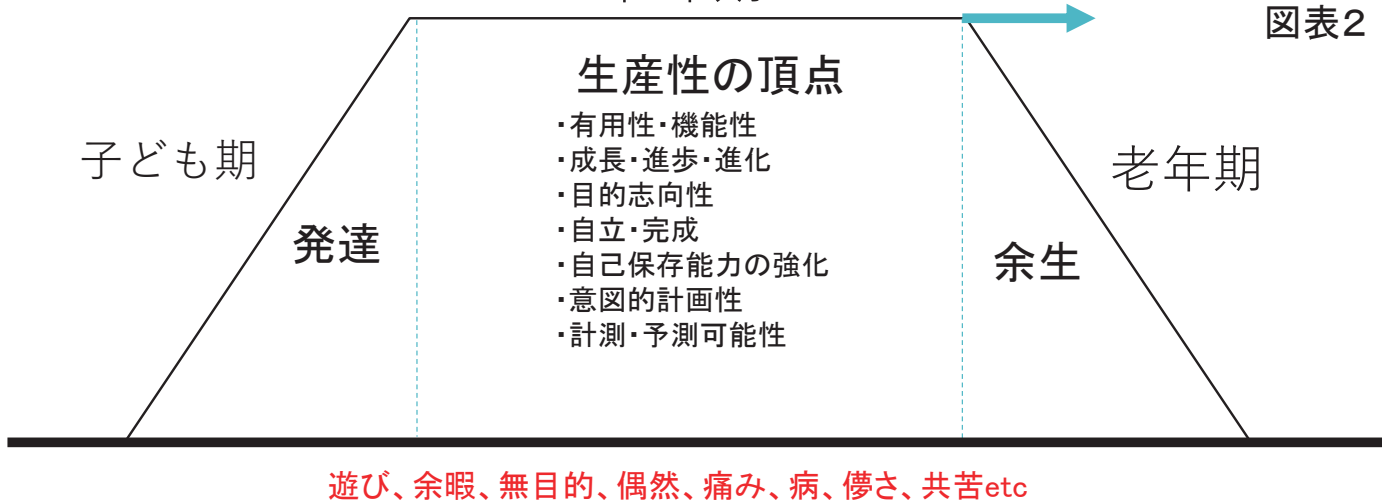
6

# 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

## 近代産業社会が描いてきた暗黙のライフモデル

壮年期

図表2



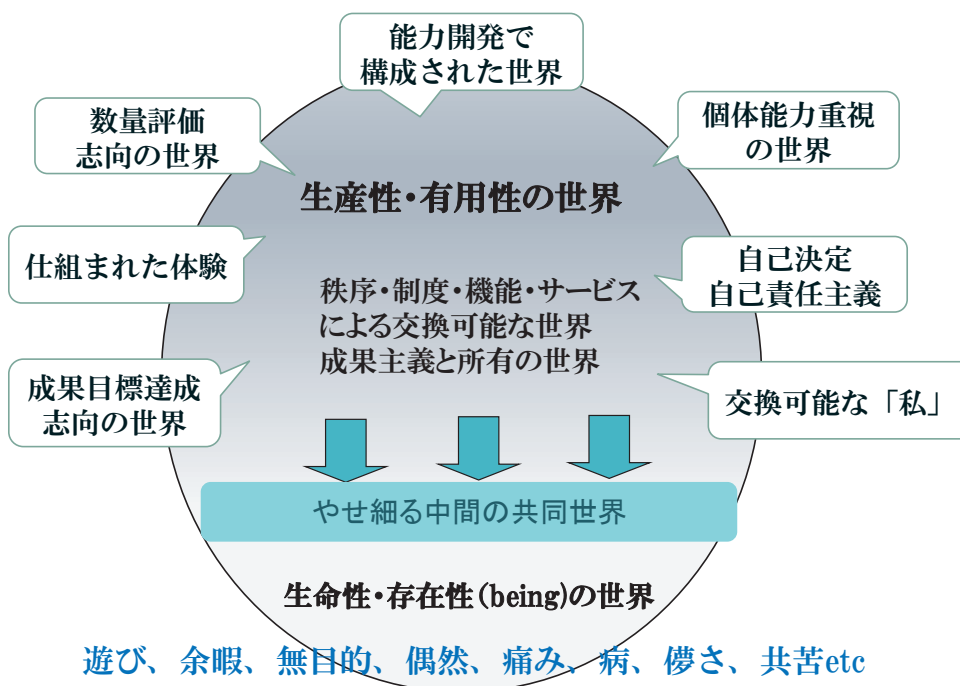
高橋勝『経験のメタモルフォーゼ』勁草書房,2007,p.52-57をもとに加筆して作成

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

## 生産性・有用性の世界の肥大／やせ細る中間の共同世界

図表3



©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

## 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

# 生産性・有用性の世界の特徴

図表3に示したように、この世界の特徴は**能力開発で構成された世界**であり、**個体能力重視の世界ゆえに自己決定・自己責任重視の世界**でもある。

あらゆる生の諸側面や諸活動を数量化(見える化)し、**成果目標を設定し、予測可能なものへ変換し、結果を重視するところに特徴がある。**図表1のように、人間の生のあらゆる側面を「**能力の束**」とみなし、**仕組みられた体験・学習プログラムでその能力開発と成果を求める世界**である。

人間を個体の能力発達に還元し、数量化し、意図的計画的に**仕組みられたプログラムでその能力を開発する。**その結果、**出来上がるのは経済産業界にとって有用な人材である。**しかし、これは**個別具体的な子ども・若者にとってすれば、「自分でなくてもよい」「誰がなってもかまわない」交換可能な自己(=空虚な自己)**ということになる。©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

9

## 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

### 事例4

私の母は、**大学を卒業して専門職に就く矢先に結婚し、私を産んだ。**当時、**そのような専門職に従事する女性**は少なく、**男性社会の中で男性と互角に戦うべく一生懸命勉強した**と思われる。しかし**結婚し、妻となり母となったこと**で、**そのような社会的アイデンティティを一度手放し、女性として生きることを求められた。**しかしながら**未だ20代前半の母にとって、それは難しかったと思われる。**そこで**母は私や弟に、母が生まれてきたように(男性?)社会で生きることが出来るように、高い点数を勉強でとり、高学歴の学校に入ることを求めた。**

**数値化された価値によってしか、アイデンティティを表現出来ない子ども(この場合は私)は本当の私とは何かということを見失い、とても空虚になった。**

**居場所とは数値の中にあるのではなく、やはり心と心のふれ合いの中にあるのだと今は思う。**

## 1. 子ども・若者の成育環境の現代的特徴

### 事例5

小学校四年生の時の担任の教師は、「運動ができる、1位・100点をとった」などというわかりやすい基準で、児童を評価する人であった。**わかりやすい基準を満たせば、先生は褒めてくれるしお気に入りになれる。**

私はそのような担任の教師に、自分の意識にないところで反発していたようで、それが身体に現れるようになってしまった。朝極度の低体温を示す日が続く、学校に行くことができない日もあった。いじめられているわけでもなく、仲の良い友だちもいる。自分は先生に嫌われるタイプの児童ではなく、勉強もできない方ではなかった。

しかし、**先生が教室にひいた見えない線、「できる子とできない子」の線が私にはとても居心地が悪く、ふと気を緩めれば「できない子」に転落してしまうという恐怖が、常に付きまとっていた。**

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

## 2. 現代社会での「自立」の意味を問う

図表2・3のような近代産業社会が進行した現代における「自立」の在り様について、教育哲学者の高橋勝は次のように指摘する。

モダニティが進行して、社会が激しく流動化しはじめると、人々は共同体における身近な他者から切り離されて、不特定多数の他者と関わらざるをえなくなる。それは、社会変動によって、人々が安定した共同体を失って孤立し、濃密な関わり合いを喪失することを意味している。**個人が共同体から「自律※すること」は、同時に「孤立すること」とほとんど背中合わせとなる。**

※引用者注:「自律」は本稿での「自立」を指す。

高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間』東信堂,2011年,18頁

## 2. 現代社会での「自立」の意味を問う

### 事例 6

大学入学のため入学式を前に上京して、見知らぬ新宿という町に出た時、途方もない居場所のなさに襲われたことがある。誰も知っている人がいない、私を知る人がいない。私はここにはふさわしくない・・・そんな思いが強く込み上げ、泣きたくなった。しかし、泣くことを許される場所さえなかった。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

13

## 2. 現代社会での「自立」の意味を問う

このような**共同体からの離脱を促進させてきたのは、長いあいだ近代化を裏支えしてきた個人の自由と自立意識を促す原理**であると高橋は指摘する。

封建社会や全体主義国家のように不平等や自由の抑圧がなされる体制下では、「自立」の原語であるindependence(独立、自立、抑圧状態からの解放)の原理は有効に働く。

しかし、ここまで見てきたように、生産性と有用性重視の世界が肥大化し、個人の能力発達に過剰な期待がかかる自己責任社会においては、**自由と自立の原理は有効に働くどころか、個人をより一層孤立へと追いやり、他者や社会と没交渉(これもindependenceのもう一つの意味である)となっていく。**

そして、これは子ども・若者の現代的貧困とも深く結びついていく。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

14

## 2. 現代社会での「自立」の意味を問う

# 現代的貧困の特徴

現代的貧困が戦後直後の貧困と大きく異なるのは、より高度化した近代の現在にあって、家族、親戚縁者、学校、会社、地域といった身近な共同体が脆弱となり、いざというときに頼れる身近な他者がおらず、友だち関係や遊び仲間さえも作れない、遊びを通じた多様な体験も享受できないといった「関係の貧困」と「体験の貧困」が加算されている点である。

むしろここでは、個人の自由と自立の原理に伴う身近な共同体からの離脱と断絶が生み出す関係の貧困が、経済の貧困に先行して広汎に生じている点が戦後直後の貧困と大きく異なる。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

15

## 2. 現代社会での「自立」の意味を問う

# 自立志向の社会が生み出す生きづらさ

図表1～3と現代における「自立」の意味、現代的貧困の特徴をふまえると、実社会に出ること自立することが、円滑に社会を回すために“強いられた外発的な自立”でしかないことを、子ども時代から身に沁み込ませてきた結果として、実社会(有用性・生産性の世界)を目前にして若者たちの身がすくみ、ひきこもるのも当然といえる。

人間の生を個人の能力発達と自己責任・自己決定、自立原理で追い立てることは、子ども・若者の生きる意欲や自尊感情を奪う結果しか生まないことに早く気づく必要がある。

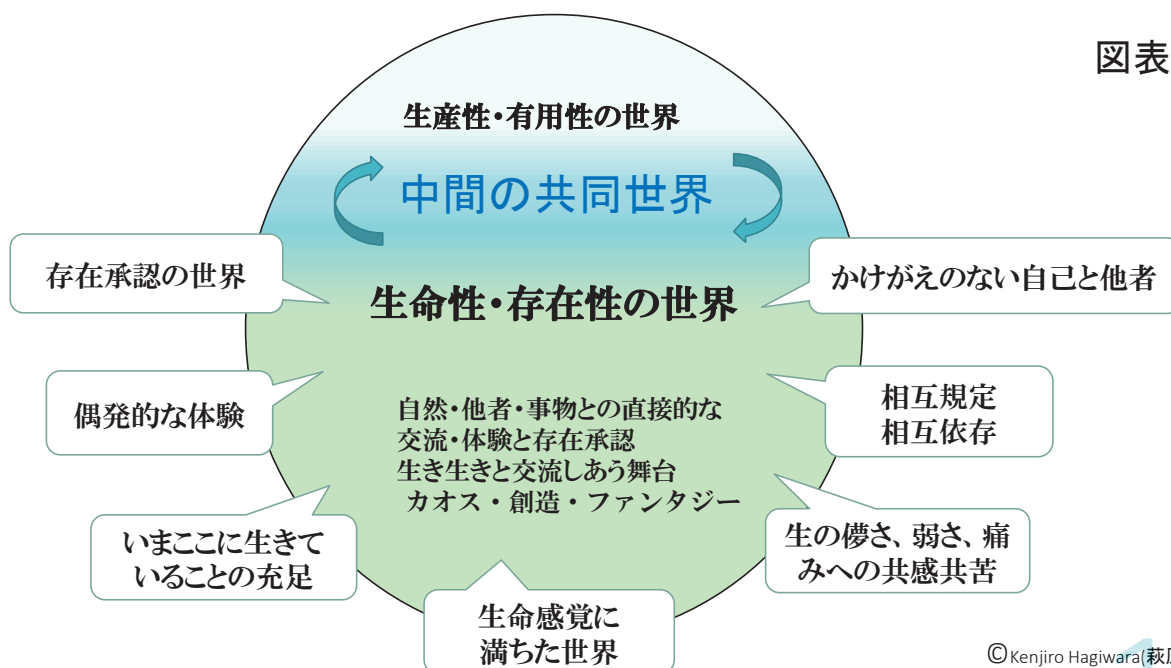
©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

16



### 3. 青少年育成支援・活動が根差す世界

図表5



© Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

17

### 3. 青少年育成支援・活動が根差す世界

## 生命性・存在性の世界の特徴

人間の生には「生命性・存在性の世界」といえるもう一つの側面がある。

それは図表4に示したような**生命感覚に満ちた世界**、**いまここに生きていることの充足感や喜びを感得する世界**である。それは自然や事物との直接的な体験や同世代や他世代との交流を通じて、互いの存在を感じ、認めあう存在承認によってもたらされる、**かけがえのない私とあなた（意味ある他者）を感得する世界**である。

またそれは失敗や挫折、病、老いや死といった**人間の弱さや生の儂さへの共感共苦を含む世界**でもある。体験は**偶発性に富み、人間の意図や計画を超えた側面を持つ**。

この世界は**遊びや趣味・余暇、伝統的な祭り・芸能、芸術、文学、アニメといった生命の躍動や生の陰影に深く根差す世界**である。いずれもフォーマルな教育や産業界においては「無駄」「脇役」「周縁」として置かれてしまっている。

© Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

18

#### 4. 子ども・若者の生の全体性の回復に向けて

## 聴いてくれる誰か

### 事例7

私の通っていた公立中学校は当時、市の中で最も荒れていて、「不良」と呼ばれる生徒たちが多かった。

教室では教師に反抗ばかりしていた彼らは、保健室やカウンセリングルームには足しげく通っていた。ひよんなことから彼らと仲良くなれ、話を聞いたところ、「**保健室の先生は最初から自分たちが悪いと決めつけずに、話を最後まで聞いてくれる**」と言っていた。その言葉が、今も私の中に残っている。

**いつもとげとげしく、周りの人や物にあたり散らしていた彼らが欲していたのは、「自分の話を聞いてくれる人」だったと知ったことは、私にとって衝撃であった。**

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

#### 4. 子ども・若者の生の全体性の回復に向けて

## 評価から逃れられる場所、弱い自分を出せる場所

### 事例8

一日の大半を過ごす生活の基盤である学校は、「居場所」を感じられる場になりうる場所である。しかし同時に学校は、児童・生徒にとって、テスト、通知表など常に「評価」を与えられる場でもある。

**「評価」から逃れたい時に逃れられる場所、弱い自分を見せてもいい場所、身近ではあるが教室とは切り離された安心できる場として「保健室がある」と思えるのと思えないのでは追い詰められ方が違う。**

📄 図表4

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

#### 4. 子ども・若者の生の全体性の回復に向けて

## “溜めのある社会”へ

ホームレスや貧困の大人や若者たちを支援する湯浅誠と河添誠も、現実社会と闘うためには、闘わなくてもよい居場所が必要であると指摘している。

彼らは本当に強い社会というのは、「人間の弱さを認めて受け止められる社会、弱さの認識から相補扶助・社会連帯の必要性の認識を通じて、『市場』とは異なる『社会』を構想できる社会」であるという(注)。こうした社会を「溜めのある社会」と彼らは名づける。

(注)湯浅誠・河添誠『生きづらさの臨界』旬報社、2008年、174頁

萩原『居場所－生の回復と充溢のトポス－』春風社、88頁

21

#### 4. 子ども・若者の生の全体性の回復に向けて

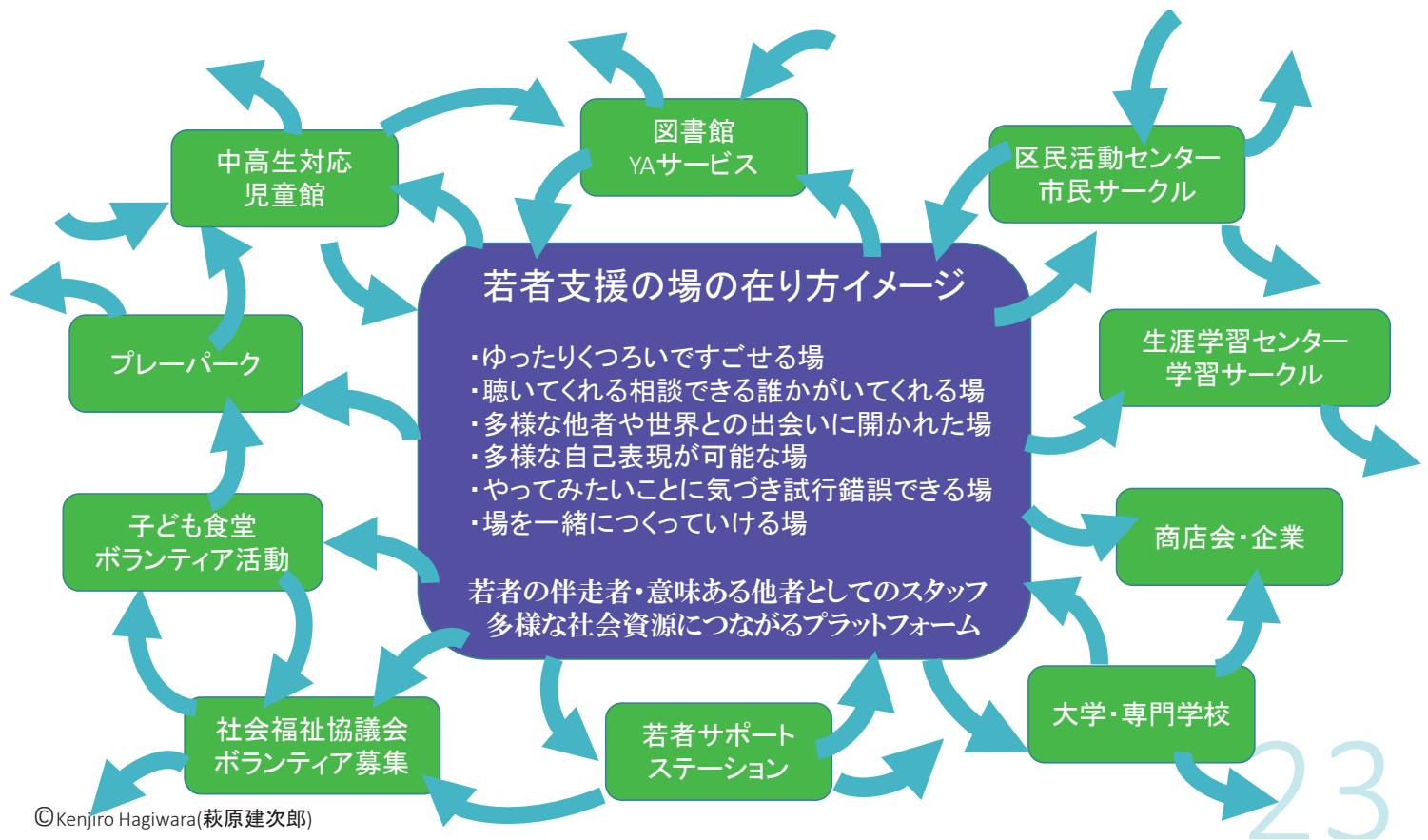
## 多様な居場所がつながる厚みと寛容の社会へ

これからの居場所のあり方としては、地域にある複数の居場所が、制度や活動の分野を超えてつながること、例えば同じ地域にある高齢者の居場所と子どもの居場所がつながるなど、言わば「居場所同士の連携」や「居場所ネットワークの構築」が期待される。(中略)

そのためにも、1つの居場所内で完結するのではなく、それぞれの居場所が他分野や多領域に開かれることが大切である。そのような多様性にかかれた活動の中で、支援の受け手が担い手になるということも実現する。

空閑浩人「社会福祉における『場』と『居場所』をめぐる論点と課題－『地域共生社会』の構築が求められる時代の中で－」(公)鉄道弘済会「社会福祉研究」第133号、2018年、24頁

22



©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

## 一つのまとめとして

これまで述べてきたように、個の自立の原理を強力に働かせた現代社会では、だれもが生きづらさを根底に抱えやすい。

それゆえ、「生きづらさ」「困難さ」というのは人生において最初から固定化されたものであったり、特定の子ども・若者だけが抱えたりするものではない。

子ども・若者からすれば多様な活動に参加することや居場所(できれば複数)があることで、日々の生きる意欲や心の糧を得て、困難な状況をいなし、それが深刻になる手前で回避したり、乗り越えていったりする。

とりわけ人生の揺れ幅の大きな若者の時期に、どのような状況にあっても「いつもと変わらぬ(とりわけ学校外の)仲間や職員・スタッフさん、地域のおっちゃんおばちゃん(のような第三の大人)に会える場」は欠かせない。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

24